



1部70円(税抜き)

# 対がん協会報

第673号

2019年(平成31年)  
3月1日(毎月1日発行)

公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です  
〒104-0061 東京都中央区銀座7-16-12 G-7ビルディング9階  
☎ 03-3541-4771 FAX 03-3541-4783 <https://www.jcancer.jp/>

主な内容

- 2～3面 ワールドキャンサーデー特集
- 4面 RFLJサミット&キックオフミーティング
- 5面 デジタルサイネージ「がんのミニ知識」提供開始

## 患者・家族がつながるSNS

### サバイバーネット運用開始

がん体験を記録、  
利用者に公開、  
共有も

日本対がん協会のがんサバイバー・クラブは、SNSを使ってがんサバイバーや家族がそれぞれの体験談などを書き込むなどして交流ができる「サバイバーネット」をつくり、運用を始めた。がんサバイバー・クラブのサイト内(<https://www.gsclub.jp/tips/8845>)から会員登録することで利用できる。

サバイバーネットは、がん患者・家族が安心して互いにつながることができる仕組みをつくらうと、垣添忠生・日本対がん協会会長が昨年実施した「全国縦断がんサバイバー支援ウォーク」へのクラウドファンディングで募った寄付金をもとに開発したシステム。治療などで外出がづらい患者が自宅にいながら患者仲間と交流したり、同じような病状や年代の仲間の体験談

を聞いたり、悩みを分かちあいたいといった思いを実現するSNSとなっている。

ネットに登録して、自分の病歴や体験談、患者会の情報などプロフィールを入力して、ネット内で公開できる情報の範囲を指定するなどして、自分に近い人を検索して、その人とつながれる機能を持っているのが特徴だ。

主に4つの大きな機能があり、1つ目として、まず、がん患者・家族が、カレンダー機能を使うことでブログを書くイメージでその日の出来事や検査結果の情報を記録できる。書きためた内容を闘病記として自分だけでなく、ネットの登録者に公開することもできる。

2つ目としては、自分と同様の立場の人を検索し、ネット上で友だち申請

をして承認されれば、メッセージのやりとりが可能になり、互いに直接相談することができる。

3つ目は、登録者同士でグループをつくって連絡し合える機能で、患者会などのイベントや講演会の企画などに活用ができる。4つ目は、このグループ機能を使って、必要な人にイベントを通知するもので、4月以降はがんサバイバー・クラブのサイト内のイベント情報に自動表示したりして、広く告知する機能も加わる。

がんサバイバー・クラブのサイト内では、登録の方法やサバイバーネットの各種機能の使い方などを解説、紹介している。日本対がん協会の活動の柱の一つである「患者・家族の支援」の有力なツールとして活用が期待されている。



サバイバーネットの使い方を紹介する動画画面



ネット内での病気体験記の入力画面

**がん相談ホットライン** 祝日・年末年始を除く毎日  
03-3541-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談(無料、電話代は別)に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」(☎03-3541-7830)を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

**医師による面接・電話相談(要予約)**  
**社労士による就労相談(要予約)**  
予約専用 03-3541-7835

日本対がん協会は医師による面接・電話相談と社労士による就労の電話相談(ともに無料、電話代は別)を受け付けています。予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までです。医師による相談は電話が1人20分、面接は30分、社労士による電話相談は40分になります。詳しくはホームページ(<https://www.jcancer.jp/>)をご覧ください。

ワールドキャンサーデー特集

# ネクストリボン シンポジウム開催

## がんと共生社会目指し

ワールドキャンサーデーの2月4日、がんと共生社会を目指す「ネクストリボンプロジェクト」のシンポジウムとトークイベントが開催された。ネクストリボンプロジェクトは朝日新聞社140周年ならびに日本対がん協会60周年の記念事業で、がんになっても生き生きと活動できる社会、がんを自分の問題として考え、早期発見に向けてがん検診を受けることが当たり前になる社会の実現を目指している。この日は、企業のがん対策をテーマにしたシンポジウムと、がんを体験した俳優や患者団体の代表らが経験や想いを語るトークイベントとの2部制で、満席の観客が熱心に聴き入っていた。

第一部のシンポジウム「がんと共生社会を目指して——企業の対策最前線とこれからの働き方——」では、まず、高橋都・国立がん研究センターがん対策情報センターがんサバイバシップ支援部長が、「見えてきた企業がん就労対策、乗り越えるべき3つの壁」と題して基調講演した。

2012年に第2期がん対策推進基本計画に、がん患者の就労ということばが入ったことで、厚生労働省が治療と仕事の両立支援のためにガイドラインを作るなど、各種対策が進んだことを紹介。一方で、がんと診断された在職者の約4割が治療前に退職していたことや、会社に支援制度があっても使っている人が約6割にとどまっていることなどの実態もわかったことを示した。企業の支援の好事例を詳しく紹介するプロジェクトを国立がん研究センターで進めてきたが、好事例の企業は、がんとわかった本人がどうしたいのかなど話をよく聞いて、試行錯誤しながら制度を作っていたことを紹介した。

そのうえで、今後、企業が乗り越えるべき3つの壁として①がんと診断さ



議論が交わされたシンポジウム

れても働き続けるということへの気づき②職場と人事労務、経営トップによる取り組み③あわてずに事例に学ぶいくつかを続けること——を指摘。社内の取り組みを作る時に、変えるべき点などをよくわかっている社内のがん経験者の貢献が大きいことを紹介した。

### 上司が両立への応援を広める

続いて、御園生泰明・電通ビジネスプロデュース部長が「ステージ4でも治療と仕事を3年間両立できている理由」と題して講演。2015年に会社の健康診断で、ステージ3bの肺がんが見つかり、どうしたらいいのかを上司に相談したところ、「オープンにしたらい」といわれ、御園生さんの状況や、治療と仕事へのサポートの必要性を同僚や取引先にメールなどを通してうまく広めてもらえたことを紹介した。

上司は「Fight together」と書かれたステッカーを作ってパソコンに張り、打ち合わせの相手に示しながら、それをきっかけに御園生さんのことを話して、応援を呼びかけた。「上司が寄り添って、治療と仕事を両立していいという安心感をくれた」と御園生さん。さらにがんになっても生き生きと暮らせることを伝えるボランティア活動することも上司が支援し、こうしたことで精神的にも安定し、仕事にも集中

できるようになったことを紹介した。

### 健康経営の推進で支援進む

その後は、「企業がん対策最前線」として、藤田直志・日本航空副社長・健康経営責任者と、竹田敬治・テルモ人事部長、櫻井公恵・櫻井謙二商店社長の3人がそれぞれの社内での取り組みを語った。藤田副社長は、各職場に健康増進活動のリーダーを置くなどして健康経営を推進してきたことで、「この5年で治療との両立ができなくなっての退職はゼロになった」と紹介した。

竹田部長は、喫煙率の低減やがんの早期発見、早期治療、職場復帰などを健康経営方針として掲げ、健康推進チームも結成して仕事として取り組んでいることを紹介。がんの就労支援制度を2017年1月から始め、欠勤ではない、無給休暇や時差勤務などを導入したことを紹介した。櫻井社長は中小企業の立場から、多様性を大前提として、がんになった人の状況と気持ちに寄り添って一緒に考え、時間単位の給与制もとり入れて対応していることを紹介した。

その後のパネルディスカッションでは会社が支援制度を導入したことで、それまではがんとわかって自分の中で抱え込んでいた人が相談する例が増えたことなどが紹介されるなど、がんになっても大丈夫とのメッセージをど

## ワールドキャンサーデー特集

う広めていくかなどが議論された。

### 向井さんや古村さんらが 前向きな想いを語る

第二部のトークイベント「がんについて語ろう——がんともに生きる、寄り添う——」では、まず、20代で2度もがんを経験したNPO法人がんノート代表理事の岸田徹さんが「Think Big!

今日1日を大切に」と題して講演した。「5年生存率は五分五分」といわれた自身の闘病経験から、生殖能力の温存やお金の問題などセンシティブな患者情報の大切さを知り、そうした情報をWEB発信する「がんノート」を立ち上げた経緯を紹介。「つらいときこそ大きく考え、患者が乗り切っていく見通しが持てるように」と取り組んでいることを、ユーモラスな口調で語った。

その後は、がん経験者のタレントの向井亜紀氏さんの司会で、25歳で乳がんを公表して手術を受けたタレントで元SKE48の矢方美紀さん、乳がんの妻を支えるONE JAPAN共同発起



岸田さん

人代表の濱松誠さん、子宮頸がん経験者で俳優の古村比呂さんの3人が現在の想いを語った。

矢方さんは、17年12月に胸のセルフチェックをしていて左胸にしこりを感じ、18年1月に乳がんが診断され、詳しい検査をした結果、リンパ節転移があることがわかり、全摘手術を勧められた。絶対に嫌だったが、「今後の人生の方が長い」と手術を決め、公表もした。「病気になったときはなぜ自分だけと思ったが、まわりをみると1人じゃないと思えるようになり、前向きになれた」と振り返った。

古村さんは、2011年に見つかり治療した子宮頸がんが、再々発したことを昨年2月のこのイベントで告白し、以来抗がん剤の治療を続けていたが、この日の午前中に主治医から抗がん剤治療を中止することを告げられた事を明かした。「抗がん剤卒業となりました」と笑顔を見せた。

一方、35歳の時に子宮頸がんにかかり、以後、その後遺症などで何度も手術を受け、2013年



古村さん

にはS状結腸がんがわかり、18回目の手術を受けてきた司会の向井さんも、毎年1回受けている大腸内視鏡検査で初めて何の異常も見つからなかったことを明かし、喜び合った。

また、最後に、甲状腺がんの手術を受けたことで、人生に向き合い、会社員を続けながら39歳で歌手となり紅白歌合戦にも出場した木山裕策さんが、その経緯を講演した。講演後には、2月4日のワールドキャンサーデーに併せてネクストリボンキャンペーンソングとして書き下ろした歌「幸せはここに」を披露した。

一方、公募していたネクストリボンイメージの最優秀・特別賞が岩越涼大さんの「fly」に決まったことも発表された。

木山さんの曲も含めて、2月4日からネット配信が始まり、配信収益の一部は日本対がん協会に寄付される。



向井さんと矢方さん

### UICC日本委員会

## ライトアップイベントで がんに立ち向かう決意示す

2月4日のワールドキャンサーデーの夜、東京都港区東新橋のカレッタ汐留で、日本対がん協会も加盟するUICC(国際対がん連合)日本委員会は、ライトアップイベント「LIGHT UP THE WORLD」を実施した。野田哲生・UICC日本委員会委員長や垣添忠生・日本対がん協会会長、乳がん経験者の女優の藤山直美さんらが点灯式に出席、がん

オレンジのUICCカラーのイルミネーションで会場を彩った。

点灯式では、参加者らが、がんに立ち向かう思いを語り、垣添会長は、世界の

がん対策は、予防・検診・治療・緩和ケアの四本柱で構成されているが、日本対がん協会



ライトアップでアピール

いると紹介。予防に関しては「禁煙に代表されるたばこ対策が最も大事だ」と訴えた。

## RFLJ2018年度サミット&amp;2019年度キックオフミーティング

## 【全国から実行委員が集合 次年度に向け課題解決へ議論】

2018年度リレー・フォー・ライフ・ジャパン(RFLJ)サミットと、2019年度RFLJキックオフミーティングが2月23日と24日にそれぞれ開催された。サミットは東京・台東区の東京文具協和会館で、キックオフミーティングは東京・中央区の国立がん研究センターで行われた。2日間にわたり、全国49の実行委員会の代表や関係者ら約100人が参加。18年度のRFLJの活動内容を振り返り、さまざまな課題解決や新たな挑戦に向けてRFLJの意義を確認し合い、19年度のRFLJへの決意を新たにした。

## 【グループワークでRFLJのより良い活動のアイデア議論】

23日のサミットでは、日本対がん協会の岡本宏之事務局長の開会の挨拶に続いて、がん経験者やその家族・友人を讃えて、会場内を歩くサバイバズラップ&ケアギバズラップが行われた。その後、平野登志雄・RFLチームマネジャーが、18年度は、石川地区で初開催されたことなど、今年度の活動報告と実行委員への感謝の言葉を述べた。

続いて、2019年のヒーローズ・オブ・ホープの受賞者の紹介のほか、10年以上開催を続けている地区や日本対がん協会への寄付率が高い地区の実行委員会の表彰、統一メッセージが伝えられるようにリニューアルされたRFLJのホームページを各実行委員会がカスタマイズして活用することなどの紹介がされた。

その後は参加者らが、16班に分かれて、「活発な実行委員会を開催するために」[「寄付の集め方・使い方」など4つのテーマについて議論するグループワークが展開された。参加者は各テ-

マを20分かけて議論し、各地の実行委員の経験や、良い事例などの情報も共有し合いながら、アイデアを付箋に書き出して、話し合い、より良い方向への解決法を確認し合った。「活発な実行委員会を開催するために」では、高校生グループの参加や、「寄付の集め方・使い方」などでは、オリジナルグッズの販売など、様々な意見が出された。

## 【19年度開催は51地区を予定】

キックオフミーティングでは岡本宏之事務局長がタバコゼロ宣言の普及や新たな検診手法の研究など19年度の活動の重点項目を解説。その後、2018年度のRFLJへの特別協賛をいただいたナショナルスポンサーの表彰式が行われた。

続いて平野RFLマネジャーから、19年のRFLは、秋田、三重、大分・中津の3地区で新たに開催し、51地区での開催を予定していることが報告された。19年度には未開催県が8県となる予定で、今後は「全国紫化計画」として、2022年度には65地区での開催を目指していく方針が示された。

また、19年の統一テーマとして、かがわ高松実行委員会から提案された「Shake Hands〜つなごう命〜愛と笑顔で」に決定したことを報告。チラシなどでの利用を呼び掛けた。

## 【RFLの寄付が治療研究の成果に】

この日の午後は、RFLによる寄付でまかなわれている活動の報告が行われた。がん研究への助成をする「プロジェクト未来」について、サバイバーとして助成の選考委員になった三阪善子・RFLJ広島副実行委員長は、研究申請の内容を読むのに苦労したが、研



サミットの会場

究者の熱い思いがくみ取れ、「RFLが役に立っていることを知りました」と語った。

その後は、次世代シーケンサーと呼ばれる遺伝子解読装置を使っての小児急性リンパ性白血病の治療成績の改善をテーマに2015年度に研究助成を受けた奥野友介・名古屋大学医学部特任講師が、その成果を報告した。普通の抗がん剤に反応しなかった白血病の4歳の女兒が、研究助成による遺伝子解析をしたことで、肺がんで見つかる遺伝子異常の白血病であることがわかり、治療ができたことを紹介。RFLの寄付による研究が目の前の患者に役立っていることを示した。

また、若手奨学医として14年にMDアンダーソンがんセンターに派遣された虎の門病院腫瘍科医師の三浦裕司氏は、米国では、MDアンダーソンでがん研究をしていると一般の人にいうと「ありがとう」といわれたことを紹介。人々ががんを自分たちの問題としてとらえていて、研究者も社会にありがとうといわれる研究をしようという気持ちに自然になっていることを解説した。

さらにRFLの寄付の使途として、協会のがん無料電話相談のほか、すい臓がんの血液検査で早期発見の研究の動向、がんサバイバー・クラブでの患者・家族支援の事業についても報告がされた。最後にこの日の会議の振り返りがされ、参加者からは寄付の使われ方の報告を受け、「自分たちがやってきたことが報われた思いになった」などの声が出ていた。



付箋をはりながら議論する参加者



19年度への決意を新たにしたい参加者ら

# デジタルサイネージ用動画「がんのミニ知識」を作成

## 16問のクイズ 対がん協会サイトで提供

日本対がん協会は、がんに関する基礎やがん検診、がん予防に関するミニ知識を、クイズ形式で学べるデジタルサイネージ用動画「がんのミニ知識」を作成した。1問30秒で、計16問。各問単位と4問ごと、全16問一括の3形式でそれぞれMP4ファイルとして、協会のサイト (<https://www.jcancer.jp/digital-signage>) から無料でダウンロードができる。

がんに関するイベント会場や病院・クリニック、薬局等の待合室などのディスプレイ画面で、がんに関する啓発デジタルサイネージ用動画として自由に利用してもらうのが目的。基本的に音声のない動画だが、16問一括の動画では背景に音楽が流れている。



「がんのミニ知識」のオープニング画面

## がんを通じて知る命の尊さ ~未来に思いをつなぐ~

日本対がん協会と朝日新聞Reライフプロジェクトの主催で2月3日、遺贈をテーマにした講演会「がんを通じて知る命の尊さ~未来に思いをつなぐ」が東京都中央区の朝日新聞社内で開かれた。日本対がん協会ほほえみ大使であるアグネス・チャンさんが「がんを通じて知る命の尊さと次世代に託す思い」と題して、鶴尾雅隆・日本ファンディング協会代表理事が「人生の集大成としての社会貢献~遺贈寄付~」と題してそれぞれ講演、その後2人によるパネルディスカッションも行われた。

アグネスさんは、2007年に乳がんが診断された経験をユーモラスに語りながら、早期発見だったことで治療も乗り越えてきたことを紹介。だからこそ検診の受診率を引き上げようと、日本対がん協会のほほえみ大使も引き受け、「どれだけいい種まきができるか」と、協会の活動に参加している思いを語った。

鶴尾さんは、遺言によって自身の財産の受取人や内容を指定する「遺贈」で寄付をしたいという人がこの5年で急速に増えてきたことを紹介。相続の一

部を寄付してもいいと考える人が2割いるとの調査結果なども示しながら、「自分の生きた意味として新しい循環が生まれればいいと思っている」と、遺贈寄付の可能性を語った。

その後のパネルディスカッションでは、アグネスさんは「人は1人で生きている訳ではなく、すべての生活はだれが支えてくれているし、自分もだれかを支えている」と、ボランティアをすることや寄付をすることが生活の一部になっていることを紹介。同じ靴を10年履いていて、一番の支出が寄付になっていることを明かし、寄付はあげるのではなく、人を応援する買物で

あるとの思いを語った。そのうえで、「寄付先の活動をすごく研究して、ちゃんとしたところに寄付すべき」として、その一つに日本対がん協会を上げながらも、寄付を受ける協会の責任の重さも指摘した。

一方、鶴尾さんは「遺贈寄付の価値を知ってもらえばもっと広まると思う。自分や家族の人生の価値や感動につながるものとして知ってもらいたい」と語った。「人生の中でだれかに助けってもらわない生活を送る確率は10%もないのでは。応援し合う社会を次世代に残したい。その責任が自分たちにある」と遺贈寄付への思いを語った。



ディスカッションするアグネスさんと鶴尾さん(右)

**訂正とお詫び** 対がん協会報2月号3面に掲載したリレー・フォー・ライフ・ジャパン2018年度収支報告一覧の表の中で、上野地区の参加人数が977人となっていたのは10,000人の誤りでした。そのため、参加人数の合計も65,862人ではなく、74,885人でした。また、雨天のため、予定を短縮して開催した都道府県に、大分と愛媛を未掲載でした。訂正してお詫び申し上げます。

## 西東京市立田無第2中学校

## 佐瀬一洋・順天堂大学教授が

## 出張授業

東京都西東京市の同市立田無第2中学校で2月6日、日本対がん協会の協力でがん教育の出張授業が行われた。講師は、循環器の専門医であり、自身も骨軟部肉腫という希少がんの経験者である佐瀬一洋・順天堂大学大学院教授。2年生の生徒約120人を対象に、がんについて約90分の授業を行った。

佐瀬教授は、9年前に悪性の骨軟部肉腫を発症し、手術の前後2年間にわたって抗がん剤による治療を受けた経験を持つ。授業で佐瀬教授は、病気がわかったときには、同じ病気を扱った映画やドラマが作られていて、いずれも主人公が亡くなる悲劇として描かれて、悲しい気持ちになったが、生存率が上がるという新しい治療法の論文に出会い、乗り切ってきたことを紹介。

その上で、文部科学省がホームページで公表している「がん教育推進のための教材」のスライド画面や対がん協



授業する佐瀬教授

会が作成したアニメ動画教材「がんって何？」も使いながら、①がんはだれでもなる可能性のある身近な病気で、もはや不治の病でない②多くのがんは予防と発見が有効③正しい情報を得ることの大切さ——の3点について、わかりやすく解説した。

授業の中では、細胞を擬人化して細胞の働きが学べる人気アニメ「はたら

く細胞」の内容にもふれながら、がん細胞についてもわかりやすく紹介。さらに、佐瀬教授は、「がんは身近な病気であるが、手ごわいので、正しい情報を得ることが大事」と訴え、がんを正しく理解して、普段通りに接してくれることががん患者の願いであることなども強調した。

## 藤沢市立本町小学校

## 望月参事が

## 出張授業

神奈川県藤沢市の藤沢市立本町小学校で2月8日、日本対がん協会神奈川県支部(かながわ健康財団がん対策推進本部)と藤沢市教育委員会の主催で出張授業が行われた。講師は、日本対がん協会の望月友美子参事で、6年生の4クラスの児童約120人を対象に、クラスごとに約45分の授業を行った。

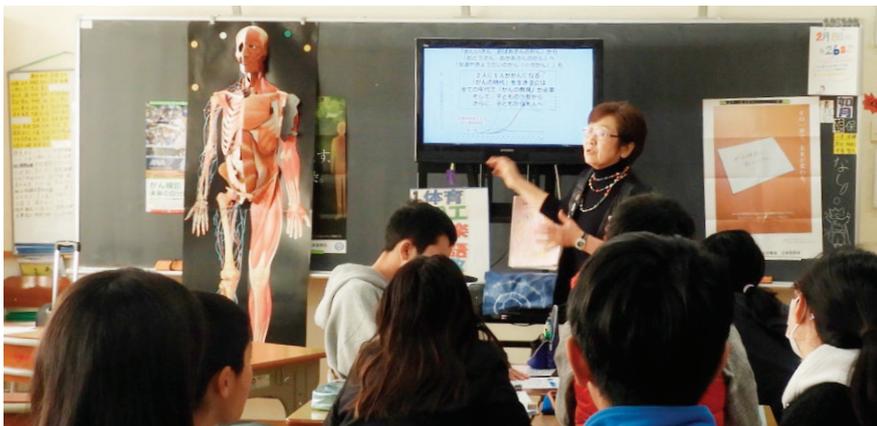
望月参事は禁煙教育に長く取り組ん

できた経験から、タバコの害についての話から授業を展開。こどもたちへの質問のやり取りの中で、タバコには200種以上の有害物質が含まれており、タバコを吸うことはそれと70種類の発がん物質を周囲にまき散らすことであり、吸った煙の毒が全身に行き、様々な臓器のがんの原因になることをわかりやすく紹介した。そのうえ

で、がん細胞とは何かから、がんについて説明していった。

子どもたちの半分近くが、細胞を擬人化して細胞の働きが学べる人気アニメ「はたらく細胞」を知っており、細胞の設計図に傷がついてがん細胞ができていくが、それを体内の免疫細胞が抑えていることなどの最新の電子顕微鏡写真を用いた説明にも自然に聞き入っていた。

授業では、がん細胞が小さいうちにみつけて早く治療すれば多くが治せる病気になってきたことやがんを防ぐには生活習慣の改善が大切であることを解説。がんを予防するために、自分ができること、家族のためにできることを書き出して考え、発表するグループワークも行われた。さらに、まわりにもしがんになった人がいたら、何ができるのかを考えることも呼びかけて授業をしめくくった。



授業する望月参事

# がん相談ホットライン

ポスター リーフレット

WEBデザインを一新

活動内容を学生に  
授業して制作依頼

若い世代への  
啓発も兼ねる

日本対がん協会はがん相談ホットラインを紹介するリーフレットとWebのデザインを一新し、さらにホットライン周知用のポスターを新たに制作した。

これらに使用したデザインは、東京デザイン専門学校の「プラス1講座『企業課題』」に参加する学生を対象に行った初の試みの「がん相談ホットラインデザインコンテスト」に応募された作品から選考した。

コンテストの受賞者は、ポスターデザインが田中葉摘さん、リーフレットデザインが深澤奈緒さん、Webデザインが荻野千秋さんの3人で、いずれもグラフィックデザイン科の1年生。ポスターデザインは主に、医療機関や調剤薬局等で使用するポスターに、リーフレットデザインは、全国のがん診療連携拠点病院や緩和ケア病棟を有する病院等で利用されるA4三つ折りのリーフレットの表紙に、Webデザインは当協会サイト内のがん相談ホットラインのページに、それぞれ使われる。

コンテストは、がん相談ホットラインを多くの人に知ってもらい、知っていても利用をためらっている人に利用を後押しするような心に響くポスターを作りたい、とホットラインの相談員らが企画した。若い世代にポスター制作を通して「がん」について知ってほしい、がん患者や家族はどのような不安や悩みを抱えているのか、それに対して周りにはどのようなサポートができるかを考えるきっかけにしてほしいという思いから、学生に制作を依頼することを考えた。

この企画を、産学協同活動を推進している東京デザイン専門学校に相談したところ快諾され、2018年12月からの授業で制作されることになった。授業は計4回で、この授業のなかでデザ

イン制作を行い、最後の授業でプレゼンテーションが行われ、そのなかからデザインが選考された。

1回目の授業が行われたのは12月4日。この日は相談員が学生にこの企画の趣旨やがん患者・家族らの悩み、ホットラインの利用のされ方などを理解してもらえよう、授業を行った。

ホットラインには、治療や症状・副作用・後遺症のことはもちろんだが、家族や周囲との人間関係、お金や仕事、毎日の暮らしのことなど生活に関わる様々な相談が寄せられる。このほか、気持ちの持ち方やこれからの生き方、死生観など相談の内容は多岐にわたる。どの相談にも根底には不安があり、不安や孤独な気持ちを聞いてほしいという相談も多い。

人生経験の少ない学生たちに、命に関わる相談や人生相談ともいえるような悩みがどれだけ伝わるか、不安を感じつつも、学生たちの真剣な眼差しに、きっといい作品が制作されるだろうという期待感も同時に湧き上がり、完成の日を待った。12月25日、プレゼンテーションが実施された。どの学生の作品もクオリティが高く、素晴らしいデザインばかりで驚いた。また、依頼の意図をよく理解し、利用する人にとってどうかという視点で制作されており、学生らのがん患者について知る努力をし、この課題に真摯に取り組んでくれたことが作品から見て取れた。

当初、この企画はポスター制作用のデザインを目的としていた。しかし、デザインの素晴らしさに、ポスターだけではもったいない、ほかにも使えないかという声があがり、急きょリーフ



ポスターのデザイン



リーフレットの表紙デザイン



ウェブのデザイン

レットとWebに使用するデザインも選考することが決まった。

ポスターデザインは一人で悩み苦しんでいる人や相談をためらう人の背中を押すようなデザインをと考えられ、崩れかけた人を人が支え、「誰かに頼ってよかったんだ。」というフレーズを表現している。リーフレットデザインは、誰でもかけやすく安心感のあるデザインをと考えられており、人と人だけでなく、人が街や社会と繋がり、そこには温かな未来や希望があることが表現されている。Webデザインは、ホットラインが必要とされていることがわかり、その存在価値が伝わるように、実際に相談者からいただいた言葉を使って受話器がかたどられている。

受賞者にはデザインが入った表彰盾と乳がん検診の無料クーポン券を授与する。(日本対がん協会相談支援室マネージャー 北見知美)

# がんサバイバーカフェ がんと障害年金を学ぶ

日本対がん協会のがんサバイバー・クラブは1月30日、東京都中央区銀座の日本対がん協会で「～経済的な負担を減らす『がん患者のための障害年金』～」をテーマに患者交流イベント「がんサバイバーカフェ」を開いた。病気やけがによる障害で日常生活や働くことに支障が出た場合に支給される公的年金制度のひとつである障害年金を、必要としても受け取れないことを防ぐため、制度や手続きを知ってもらうと企画されたもの。がん患者の障害年金に詳しい社会保険労務士の山岸玲子氏が障害年金の基礎から申請時のポイントまで事例を交えて、わかりやすく解説、患者ら約15人が参加した。

山岸氏は、障害年金が、国がやっている社会保険制度であるのに、がん患

者の中には負のイメージを持っていて申請しない人がいる現状にふれ、まずは制度を知って、申請することを勧めた。そのうえで、受給するためには、①初診日の証明②保険料を納めていたこと③障害の程度の3つの要件を満たす必要があるとして、その要件を解説。中でも、最初のハードルとして、医療機関による初診日の証明が大切であることや、請求するタイミングが初診日から1年6カ月経過してからであることなどを説明した。

膀胱がんで人工ぼうこうをつけていたが、15年間、障害年金を請求できることを知らず、老齢年金のこと調べていて受給できることを知り、時効の関係もあったが、5年分はさかのぼって受給できた人の例も示しながら、制度の利用を勧めていた。



障害年金について解説する山岸氏

困ったときは、報酬がかかり、必ずしも受給できるかはわからないものの、社会労務士に依頼することも勧めた。

参加者とのフリートークの中で、社労士の中には障害年金の案件は受けない人もおり、社労士のホームページをみたうえで、電話して確認したり、地元の社労士会に問い合わせたりして、社労士を探すことなどもアドバイスしていた。

## 映画「母を亡くした時、僕は遺骨を食べたいと思った。」

### 垣添会長が 上映記念 トークショー

大腸がんになった母を支える息子ら家族のやりとりを描いた映画「母を亡くした時、僕は遺骨を食べたいと思った。」の上映を記念したトークショーが2月13日都内で開かれ、垣添忠生・日本対がん協会会長が、作品の原作者宮川サトシさん、監督の大森立嗣さんとがんについて、がん患者を支える家族のあり方について語りあった。

映画は、原作者の宮川さんが実際に体験した、大腸がんで亡くした母との最期の日々を暖かく描いた作品。トークショーでは、垣添会長が自身も大腸がんと腎臓がんのサバイバーであり、かつ12年前に妻をがんで亡くした身であることを紹介。映画の中で妻を亡

くし、酒をあびる父親役の石橋蓮司さんの姿に自分が重なったことを語り、グリーフケアの必要性を訴えた。

また、宮川さんが母を亡くした悲しみを、漫画に描くことで乗り越えてきたことを語ると、垣添会長も、妻を亡くして1年ほどたって、妻の病歴や自分の苦しみを書く作業を続けたことで辛さが減っていき、「妻を看取る日」という本を書き上げるにつながつたことを紹介した。

さらに垣添会長は、昨年実施した



グリーフケアの必要性を訴えた垣添会長(中央)

「全国縦断がんサバイバー支援ウォーク」で映画のロケ地になった大垣市も訪れたことにふれる中で、がんはだれでもなる普通の病気であり、患者差別がなくなる社会の実現を目指して活動を続けている想いも語った。

### 古本で日本対がん協会に寄付ができます

読み終えた本やDVDなどを活用しませんか？

詳しくは「チャリボン」 <https://www.charibon.jp/partner/JCS/> (ISDNのバーコードがついた書籍類が対象です)



お問合せ(株式会社バリューブックス)：0120-826-295  
受付時間：10:00-21:00(月～土) 10:00-17:00(日)